Keio Associated Reposi	tory of Academic resouces					
Title	レヴィナス、リクール、アーレントにおける「罪」と「責任」の概念の区別に関する研究					
Sub Title	Responsibility and culpability in Levinas, Ricoeur and Arendt					
Author	村上, 暁子(Murakami, Akiko)					
Publisher	慶應義塾大学					
Publication year	2019					
Jtitle	学事振興資金研究成果実績報告書 (2018.)					
JaLC DOI						
Abstract	これまで申請者はレヴィナスの自然本性論・存在論批判、因果論的時間性批判、構造主義批判の論点をヒューマニズの別期だい合産図のもとに位置づけ、ユダヤ教・キリスト教の宗教思想に由来する発想を生かした独自の主体性規定を解明することで、レヴィナスのユマスムの独自というなどのようとで、とかしてきた。しかしレヴィナスにおける他人に対する責任の概念は、(時に誤って原罪にも比される)罪障性によって多大な負荷をかけられていると批判されてきた。レヴイナスの語る「倫理」の独自性を十分に明確化するためには、他の理論との比較検討に開かれた仕方で、責任という根本概念の規定を検討する必要があるだろう。そこで申請者は、レヴィナスとリクール、アーレントにまたがる比較研究である本プロジェクトを立ち上げ、現代思想の実施における罪と責任のあいだの連関の内実を吟味することで、それが倫理的行為の可能性について考察する倫理学にとって妥当かど分かを検討しようとしてきた。初年度である本年度には、まとして以下一つの進度があった。まず、原典院解に基づいて、責任と罪を結びつける(あるいは分離させる)三者の立場の相違点を整理した。これにより、超越神をモデルとする聖波を有面的で罪を贖うことのうちに責任を位置づけるレヴィナスの「罪先行型責任理解」と、宗教的罪、道徳的罪から共同体への帰属に基づけるレヴィナスの「罪先行型責任理解」と、宗教的罪、道徳的罪から共同体への帰属に基づく無粋に政治的な責任概念を区別するアーレントの「決策を罪を関うことのうちに責任を位置づけるレヴィナスの「罪先行型責任理解」と、宗教的罪が言を関係の責任理解」でして、養後の解釈学のうちで悪のの関性における原理の基を指摘しつつールの「原罪と罪の区別に基づ其任理解」と、活力され、活力されているのがについてきた「ディナスススへ特異性」に関する講演で言及)。また、一神教の伝統の中核にあるいくつかの発想が三者の思索においてどのように解釈され、活力されているのかについても調査を行った。まずレヴィナスが、他人の苦しみや虹スによっているの情においては、非常なを情報としての社会性に着目する一へかの「エンダヤ的源泉による理性の宗教」(1919年)の発想と極めて近い人類の捉え方にもとづいて神と人との関係のうちなる責任の概念を複楽していることをで関に関連して、(1)中の思認と人間の自由意志の関係。(2)倫理的行為が展開さるまでからとと責任を担うことの区別に関連して、(1)中の思認とと行為論で別様を持ていまいましているとと考でありまがは、1)ノ東の複数を解説といったいくつかの論点に別かわる更なを考究の必要性が判した。各思想なの相違は、宗教と倫理、政治と社会の次元の区分けにかかわる整定とを責任を担合した。各思想にないまでは、1)ノ東の複数を解説といったいくつかの論点に関すると対なの情報によるではないまないまではないまないまないまないまないまないまないまないまないまないまないまないまないまな					

	notion of responsibility in interpersonal relationships between Men and God, and it has a striking similarity with Cohen's discussion in "Religion of Reason: Out of the Sources of Judaism"(1919) on the idea of Humanity as brotherhood in which suffering or hunger of others invokes "Mitleid"(compassion) and thus a particular responsibility. Also, through the analysis of the biblical hermeneutics and the action theory in Ricoeur who has backgrounds in Protestant Christianity, and through the interpretation of the conception of "Willing" in Arendt whose academic career started with the research on Love in Augustine, I realized the need of further investigation into (1)the connection between human free will and God's grace, (2)the views on temporality for existence in which ethical actions take place, and on (3)the plurality and the unity of humanity, in order to understand why they associate responsibility and culpability in respective ways.
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=2018000005-20180220

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2018 年度 学事振興資金 (個人研究) 研究成果実績報告書

研究代表者	所属	文学部	職名	助教	- 補助額	200 (B	(B)	3) 千円
	氏名	村上 暁子	氏名 (英語)	Akiko MURAKAMI			(b)	

研究課題(日本語)

レヴィナス、リクール、アーレントにおける「罪」と「責任」の概念の区別に関する研究

研究課題 (英訳)

Responsibility and Culpability in Levinas, Ricoeur and Arendt

1. 研究成果実績の概要

これまで申請者はレヴィナスの自然本性論・存在論批判、因果論的時間性批判、構造主義批判の論点をヒューマニズムの刷新という企図のもとに位置づけ、ユダヤ教・キリスト教の宗教思想に由来する発想を生かした独自の主体性規定を解明することで、レヴィナスのユマニスムの独自性を明らかにしようとしてきた。しかしレヴィナスにおける他人に対する責任の概念は、(時に誤って原罪にも比される)罪障性によって多大な負荷をかけられていると批判されてきた。レヴィナスの語る「倫理」の独自性を十分に明確化するためには、他の理論との比較検討に開かれた仕方で、責任という根本概念の規定を検討する必要があるだろう。そこで申請者は、レヴィナスとリクール、アーレントにまたがる比較研究である本プロジェクトを立ち上げ、現代思想の文脈における罪と責任のあいだの連関の内実を吟味することで、それが倫理的行為の可能性について考察する倫理学にとって妥当かどうかを検討しようとしてきた。初年度である本年度には、主として以下二つの進展があった。

まず、原典読解に基づいて、責任と罪を結びつける(あるいは分離させる) 三者の立場の相違点を整理した。これにより、超越神をモデルとする聖潔な者の面前で罪を贖うことのうちに責任を位置づけるレヴィナスの「罪先行型責任理解」と、宗教的罪、道徳的罪から共同体への帰属に基づく純粋に政治的な責任概念を区別するアーレントの「狭義の罪、広義の責任理解」、そして、象徴の解釈学のうちで悪の問題における原罪の重みを指摘しつつも、よく生きる倫理的行為の可能性の条件として個人の罪に対する赦しの問題を考慮するリクールの「原罪と罪の区別に基づく責任理解」の違いを特徴づけることができた(「レヴィナスのユマニスムの特異性」に関する講演で言及)。また、一神教の伝統の中核にあるいくつかの発想が三者の思索においてどのように解釈され、活用されているのかについても調査を行った。まずレヴィナスが、他人の苦しみや飢えによって共苦することで個別的責任を負う兄弟関係としての社会性に着目するコーヘンの『ユダヤ的源泉による理性の宗教』(1919 年)の発想と極めて近い人類の捉え方にもとづいて神と人との関係のうちなる責任の概念を構築していることを確認した(この点に関連し Nordmann 氏の最新研究に関する書評を執筆)。プロテスタンティズムを背景に持つリクールの聖書解釈学と行為論の連関、および、アウグスティヌスにおける愛の研究を出発点に持つアーレントの自由意志論に関する分析においては、罪を背負うことと責任を担うことの区別に関連して、(1)神の恩寵と人間の自由意志の関係、(2)倫理的行為が展開される実存者の時間性、(3)人類の複数性に対する解釈といったいくつかの論点にかかわる更なる考究の必要性が判明した。各思想家の立場の相違は、宗教と倫理、政治と社会の次元の区分けにかかわる議論一般の枠組み上の問題にもかかわるため、引き続き宗教哲学と倫理学のはざまで思考するレヴィナス、リクール、アーレントの論点を慎重に精査し、その一般的特徴の解明に向けて取り組む必要がある。

2. 研究成果実績の概要(英訳)

My former research concentrated on the analysis of Levinas's conception of Humanism, in which his unique notion of subjectivity and its framework play an important role. However, Levinas's idea of responsibility toward others has often been criticized for putting too much burden by culpability. This comparative study of Levinas, Ricoeur, and Arendt started by the need to reconsider the relevance of this connection between responsibility and culpability to general problems in ethics, through a close examination of it in the context of contemporary thoughts.

During this academic year, this project proceeded mainly in two ways.

First, based on the interpretation of the original texts, I could characterize different ways of connecting (or separating) responsibility and culpability. Levinas's position can be described as "responsibility on the basis of culpability" as it finds responsibility toward other persons inside culpability in the face of absolute Otherness of a transcendent God. Arendt's position can be characterized as "sin in a narrow sense, responsibility in a broad sense" as she appreciates responsibility in a strictly "political" sense, derived from membership of a community, different from both religious and moral concepts of sin. Ricoeur's position represents "responsibility based on the division of original sin and individual sin", since he regards "Pardon" of individual sin as the possibility condition of ethical conduct, even though he underlines the grave impact of original sin regarding the problem of evil.

Second, I considered their reinterpretations of some of the core conceptions in the tradition of monotheism and how they apply the result to their own thoughts. For example, Levinas proposes a notion of responsibility in interpersonal relationships between Men and God, and it has a striking similarity with Cohen's discussion in "Religion of Reason: Out of the Sources of Judaism"(1919) on the idea of Humanity as brotherhood in which suffering or hunger of others invokes "Mitleid"(compassion) and thus a particular responsibility. Also, through the analysis of the biblical hermeneutics and the action theory in Ricoeur who has backgrounds in Protestant Christianity, and through the interpretation of the conception of "Willing" in Arendt whose academic career started with the research on Love in Augustine, I realized the need of further investigation into (1)the connection between human free will and God's grace, (2)the views on temporality for existence in which ethical actions take place, and on (3)the plurality and the unity of humanity, in order to understand why they associate responsibility and culpability in respective ways.

3. 本研究課題に関する発表								
発表者氏名 (著者・講演者) 発表課題名 (著書名・演題)		発表学術誌名 (著書発行所・講演学会)	学術誌発行年月 (著書発行年月・講演年月)					
村上暁子	レヴィナスのユマニスムの特異性	三田哲学会 MIPS 例会(講演)	2018年10月27日					
村上暁子	Sophie Nordmann, Levinas et la philosophie judéo-allemande.	レヴィナス協会編『レヴィナス研究』	2019 年 7 月予定					